

音のない世界に生きて

インタビュー

聞こえる世界と壁 出会いがあれば 違う文化に気づく

手話を言語のひとつと認める「手話言語法」の制定を求める機運が高まっている。昨年までの3年間に、すべての地方議会でも意見書が採択された。3年後には東京でパラリンピックも開かれる。子どもに手話で国語を教えたろう者の早瀬憲太郎さんに、手話通訳を介して、聞こえる世界と聞こえない世界について聞いた。

「東京のスタジオで9日間出演しました。気づかされたのは、いかに他の障害のことを知らなかったかということ。僕にとっては、車いすの人も目の見えない人も『聞こえる世界』の人ですから」

「一方で、だからこそ、障害というバイアス（先入観）なしに純粹なスポーツとして伝えられたのでは、とも思います。初めて目が不自由な人たちのゴールボールという競技を知りました。鈴の入ったボールを投げ合い、ゴールを奪う競技です。聞こえる人たちにろう者のことを知ってもらうには、僕も違う障害の人たちの世界を知らなくてはと強く感じました」

「3年後は東京です。日本の受け入れは大丈夫でしょうか。『最近スマホなど情報ツールも普及し、電車の中に電光掲示板があるようにハード面は整いつつあります。でも、人の心つまりソフト面はまだです。例えば、空港での搭乗手続きで、僕が『耳が聞こえないから筆談を』と紙に書くとき、航空会社の人は隣にいる妻に話しかけ、僕とコミュニケーションをとろうとします。妻もろう者なのですが、差別する気持ちはないのでしょうか、聞こえない人と一緒にいるのは、聞こえる介護者だと無意識に思っているのかもしれない。そうした意識を変えるのは時間がかかるでしょう」

「『聴者』と『ろう者』が接する機会のないことが問題です。焼き肉屋に行ったときのことです。若い男性店員に身ぶりでメニューを頼むと、点字メニューを持ってきました。怒るといふよりびっくりです。点字は目が見えない人のためのもの、と伝えたら彼は突然泣き出しました。食事の後、彼が手紙を持ってきた。『見えない人との区別ができなかった自分に悔しくて泣いた』と。僕は『君が悪

いんじゃない。これまで聞こえない人に会えなかっただけ。今日出会えてよかった』と伝えました。『数年後、僕が監督をした映画の上映会で、手話の堪能な若者が『覚えていきますか』と話しかけてきました。あの店員でした。福祉施設の職員として働いていると言っていました。こういう出会いと気づきが社会にもっと必要です」

ろうの子どもたちに手話で教えるろう者

はやせ けんたろう
早瀬 憲太郎 さん

1973生まれ。学習塾「早瀬道場」塾長。NHK「みんなの手話」講師を8年、映画「ゆずり葉」（2009年）の監督も務めた。

は音楽がかかっていたことも知りませんでした。僕たちのお化け屋敷は聞こえる人にも新鮮で、かえって怖かったらしいですよ」

「聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。」

「共生するためにはどうすればいいのかに気づきました。聞こえる世界と聞こえない世界があることを認めた上で、違いを知る。それで初めて先に進める、と。聴者には音があるのが当たり前で、ろう者が、当たり前なのが当たり前ではない世界がある。僕にとっては音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知ろう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すことにもなります」

「映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのでしょうか。」

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にハマり、あるコンテストで2位になった。受賞あいさつでこう言っただけです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだこと、自分の感性も育った』と。僕は聞こえない自分で良かったと思っていますが、母も聞こえない僕を産んでよかったと思ってくれていることが本當にうれしかったです」

「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

「『聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。』

「共生するためにはどうすればいいのかに気づきました。聞こえる世界と聞こえない世界があることを認めた上で、違いを知る。それで初めて先に進める、と。聴者には音があるのが当たり前で、ろう者が、当たり前なのが当たり前ではない世界がある。僕にとっては音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知ろう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すことにもなります」

「映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのでしょうか。」

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にハマり、あるコンテストで2位になった。受賞あいさつでこう言っただけです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだこと、自分の感性も育った』と。僕は聞こえない自分で良かったと思っていますが、母も聞こえない僕を産んでよかったと思ってくれていることが本當にうれしかったです」

「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

「『聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。』

「共生のためにはどうすればいいのかに気づきました。聞こえる世界と聞こえない世界があることを認めた上で、違いを知る。それで初めて先に進める、と。聴者には音があるのが当たり前で、ろう者が、当たり前なのが当たり前ではない世界がある。僕にとっては音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知ろう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すことにもなります」

「映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのでしょうか。」

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にハマり、あるコンテストで2位になった。受賞あいさつでこう言っただけです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだこと、自分の感性も育った』と。僕は聞こえない自分で良かったと思っていますが、母も聞こえない僕を産んでよかったと思ってくれていることが本當にうれしかったです」

「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

「聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。」



「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし」
＝竹花徹郎撮影

手話は第1言語 法律で認めて 当たり前を実現

「聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。」

「共生のためにはどうすればいいのかに気づきました。聞こえる世界と聞こえない世界があることを認めた上で、違いを知る。それで初めて先に進める、と。聴者には音があるのが当たり前で、ろう者が、当たり前なのが当たり前ではない世界がある。僕にとっては音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知ろう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すことにもなります」

「映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのでしょうか。」

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にハマり、あるコンテストで2位になった。受賞あいさつでこう言っただけです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだこと、自分の感性も育った』と。僕は聞こえない自分で良かったと思っていますが、母も聞こえない僕を産んでよかったと思ってくれていることが本當にうれしかったです」

「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

「『聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。』

「共生のためにはどうすればいいのかに気づきました。聞こえる世界と聞こえない世界があることを認めた上で、違いを知る。それで初めて先に進める、と。聴者には音があるのが当たり前で、ろう者が、当たり前なのが当たり前ではない世界がある。僕にとっては音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知ろう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すことにもなります」

「映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのでしょうか。」

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にハマり、あるコンテストで2位になった。受賞あいさつでこう言っただけです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだこと、自分の感性も育った』と。僕は聞こえない自分で良かったと思っていますが、母も聞こえない僕を産んでよかったと思ってくれていることが本當にうれしかったです」

「高校に入って、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

「聞こえる文化と聞こえない文化の融合ですね。」